

有馬氏倫と徳川宗春

一八代将軍吉宗と若き日の宗春（通春）の関係の傍証―

当論はが、尾張藩第七代徳川宗春ⁱとなる前の松平主計頭通春と八代将軍吉宗ⁱⁱの関係を探る傍証である。特に吉宗の御側御用取次であった有馬氏倫ⁱⁱⁱと、通春の繋がりを確かめる。

<有馬氏倫>

有馬氏倫は、加納久通^{iv}と共に八代将軍徳川吉宗の最側近として御側御用取次を勤めた人物である。

氏倫は、紀州藩士の有馬義景と、建部光延の娘との間に生まれた。紀州藩第五代徳川吉宗の側近として紀州藩士時代は御用役・番頭などを勤めた。正徳六（1716）年五月に吉宗が八代将軍になると、氏倫は加納久通とともに旗本に転身し御側御用取次となる。紀州藩士から旗本になった数少ない一人である。紀州藩と同じ1300石であった^v。

改元した享保元（1716）年七月二十二日、吉宗が征夷大將軍に就任をする將軍宣旨の大札^{vi}のために、大名旗本の内、十五人が従五位下^{vii}に叙された。大名では信濃高遠藩主内藤弥三郎頼卿は伊賀守、筑前福岡藩の支藩である秋月藩主黒田修理長貞（上杉鷹山の外祖父）は甲斐守、肥後熊本藩の支藩である新田藩主黒田仁三郎利貞は備後守に叙任された。吉宗の側近で御側御用取次の小笠原主膳胤次は肥前守、加納角兵衛久通は近江守（後に遠江守）、有馬四郎右衛門氏倫は兵庫頭に叙任された。この時、大名でもなく旗本でもなく、さらに別家を立てて独立したわけでもない人物が叙任されている。松平求馬通春、つまり後の徳川宗春である。通春（宗春）はあくまでも尾張藩の部屋住。十五人の中では特別であり、吉宗またはその側近が宗春を特別視していたことが伺われる。

氏倫は享保二年、2300石となり、享保十一（1726年）年に伊勢・下野・上総において7,700石の加増を受け、加納久通とともに合計1万石を領する大名となった。この大名に叙されてから、御側御用取次の役割は公的な政務から徐々に遠ざかることとなる。^{viii}

<渡辺恭綱・有馬氏久>

氏倫には、大奥で働いていた娘しかなく、養子を迎えた。有馬氏久^{ix}である。彼は紀州藩士渡辺恭綱^xの子である。

渡辺恭綱は、紀州藩初代徳川頼宣の三男松平頼純^{xi}の長男松之助であった。頼純は寛文十（1670）年に伊予西条藩を立藩するが、松之助こと恭綱は頼純が紀州藩の部屋住の時に誕生していた。しかも正妻の子ではなかった。松之助が生まれて三年後に頼純の正妻（本多忠義^{xii}の娘）の子松平頼路^{xiii}が生まれ、松之助こと恭綱の身分は宙に浮いてしまう。養い役の渡辺直綱^{xiv}に預けられたままであった。父松平頼純が伊予西条藩を立藩してまもなく、伯父の紀州藩第二代光貞によって養い役の渡辺姓を名乗ることを命じられた。その恭綱の三男が氏久である。東照大権現徳川家康の直系の玄孫

(孫の孫) である氏久の将来を見つめ、氏倫は有馬家の養子にした。

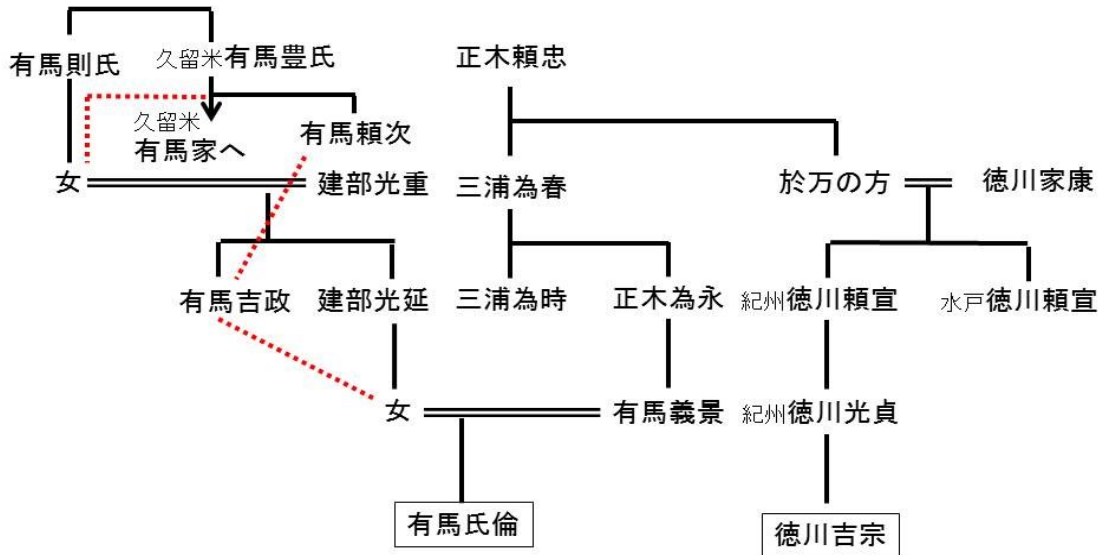
<有馬家>

さて、氏倫の有馬家とはどういう家なのであろうか？氏倫の父は紀州藩士有馬義景、紀州藩士正木為永の子であった。正木為永は安房里見氏の家臣であった三浦為春（正木為春；本家は三浦を名乗る）^{xv}の四男である。為春は紀州藩初代藩主徳川頼宣と水戸藩初代藩主徳川頼房の母である養珠院（於万の方）の実兄であり、頼宣の傅役となり、紀州藩家老となった。氏倫の父有馬義景は、紀州藩の家老三浦為時の甥であり、二代藩主光貞の又従兄弟である。つまり血統的には氏倫と吉宗は互いの父方の祖父が従兄弟同士であった。

氏倫の母は紀州藩士建部光延の娘である。建部光延の兄であり、建部光重の長男が有馬吉政である。建部光重は関ヶ原の戦いで西軍に属し所領を没収された^{xvi}。そのために長男の吉政は母方で育てられた。吉政の生母は有馬則氏の娘である。則氏は若くして亡くなったために弟である有馬豊氏^{xvii}が摂津有馬本家の跡を継いでいた。豊氏は筑後久留米藩初代藩主である。豊氏は兄の娘を養女とした。吉政は母方の大叔父である豊氏の元で育てられ、豊氏の三男有馬頼次^{xviii}の養子となった。吉政は建部光重の長男であったが、建部姓から有馬姓となったのである。その吉政の弟が建部光延である。

吉政は紀州藩士となった。吉政には子がなく、同じく紀州藩士となった弟の建部光延の娘を養女とし、正木為永の子である義景と娶らせた。その義景の嫡男が氏倫である。つまり、有馬氏倫の本家は久留米藩の有馬家である。

<図 1 >



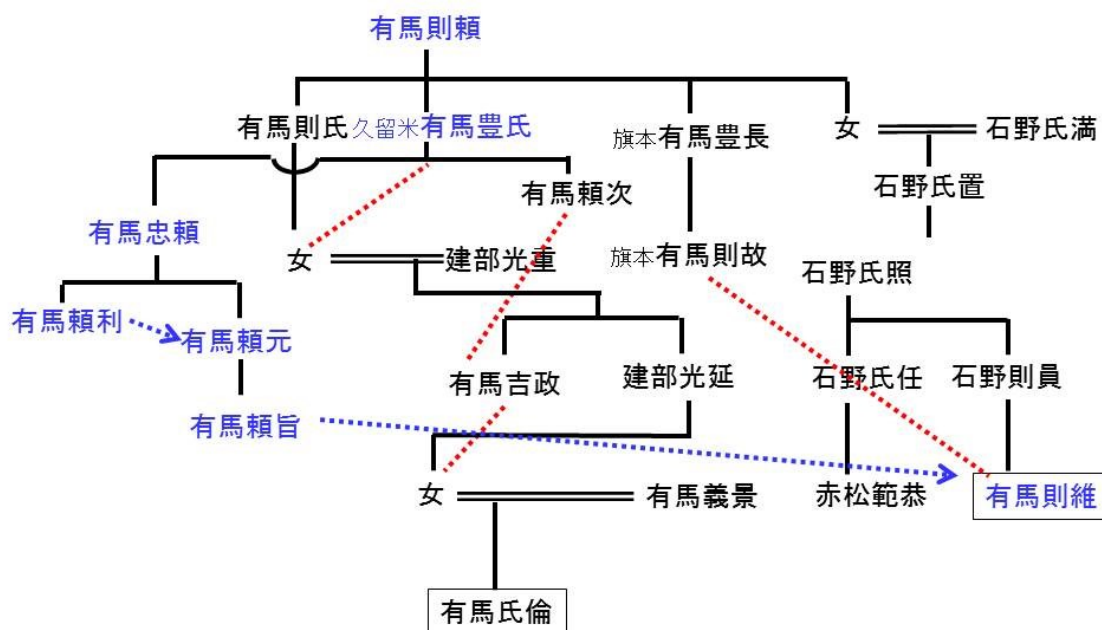
有馬家と紀州藩家老三浦長門守家と紀州徳川家

<宗春と有馬本家>

さて、ここで徳川宗春と有馬家について考察してみる。万五郎通春こと徳川宗春が十四歳の宝永六年(1709)年三月。尾張四代藩主徳川吉通^{xix} (宗春の長兄) が名古屋に帰国する直前に、筑後久留米 (現在の福岡県久留米市周辺) 藩主有馬玄蕃頭則維^{xx}より、万五郎の叔父である四谷松平義行^{xxi}に手紙が届けられた^{xxii}。

有馬則維と松平義行は同じ従四位下の江戸城大広間詰め。有馬則維は三年前に久留米藩二十万石を継承し、相次いで男子が亡くなり、継嗣がない状態であった。則維自身も有馬家とは遠縁であったが (図2参照)、五代将軍徳川綱吉の御側用人であった柳澤吉保が動いたことで末期養子となり久留米藩を継承した過去があった。

<図2>

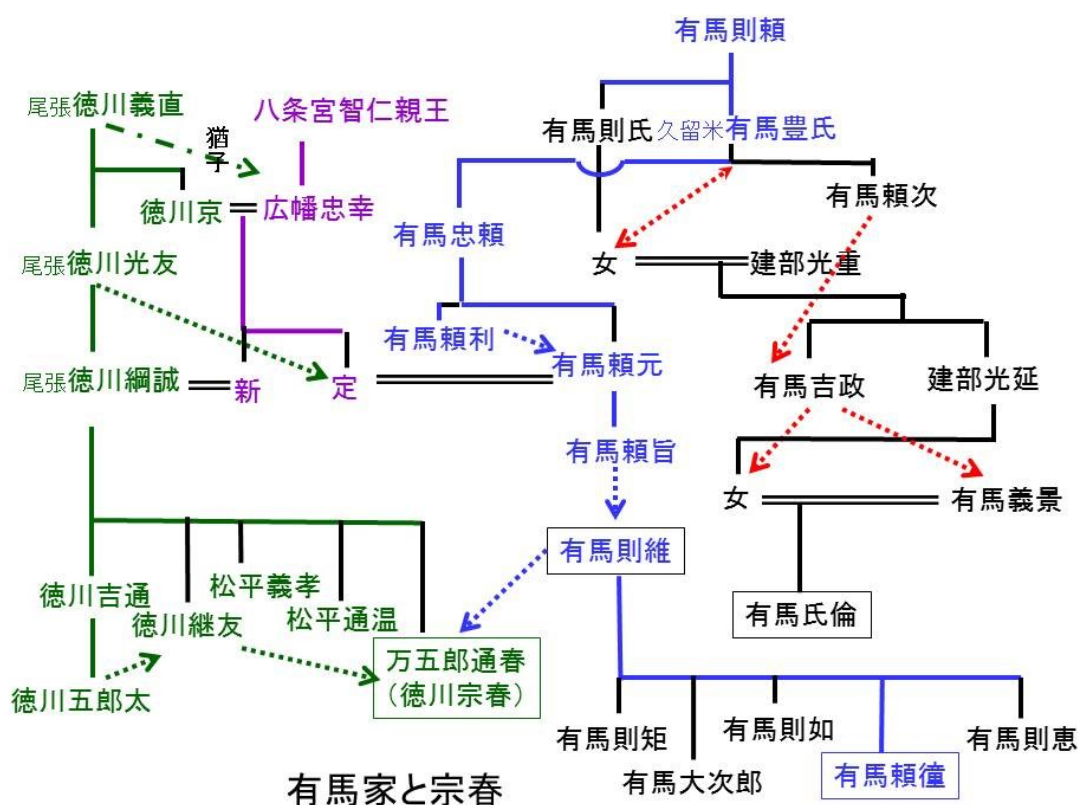


有馬家略家系図 則維の系譜

則維の養祖父である有馬中務大輔頼元^{xxiii}の継室^{xxiv}は権大納言広幡忠幸^{xxv}の息女定姫。忠幸は尾張藩初代権大納言徳川義直^{xxvi}の猶子であり、忠幸の御簾中 (正室) は義直の長女京姫。京姫の長女新姫は、宗春の父親である尾張徳川三代当主綱誠^{xxvii}の御簾中。新姫の妹である定姫は宗春の祖父である二代藩主徳川光友の養女として久留米藩に嫁いでいた。尾張徳川家と有馬家と広幡家とは、縁戚となっていた。(図3参照)

万五郎 (宗春) の養子縁組の時には定姫も光友も綱誠も既に亡くなっていた^{xxviii}。縁はそれほど濃いものではなかったかもしれないが、久留米藩では藩の存続をかけていた。わずかとはいえ縁のある御三家から万五郎こと宗春を養嗣子に得ようとしたのである。

< 図 3 >



他にも尾張藩に兄弟がいたのになぜ宗春だったのか？

宗春の外祖父三浦太次兵衛は、元々は遠州横須賀の浪人。母である宣揚院梅津は遠州横須賀の生まれ。豊臣秀吉の時代、有馬家初代藩主（有馬家第二代）豊氏は遠州横須賀の領主であったので、その縁もあったのかもしれない。

たとえ則維に実子ができても万五郎に跡を継がせ、その実子は万五郎の養子にするという約束の書状であった。しかし、翌年に有馬則維に三男長十郎則如が生まれてしまう。過去に久留米藩では分家支藩の松崎藩が継嗣騒動で断絶^{xxix}しており、そうした継嗣問題に巻き込まれることを恐れた尾張藩は、仮養子にまでなった万五郎通春こと宗春の有馬家との養子縁組を解消されてしまった^{xxx}。後年に則如は早世し、四男の頼僮^{xxxi}が跡継となるが、則維は五男の宅之進則恵を後継にしようと画策し、騒動が持ち上がった。

< 宗春と有馬氏倫 >

さて、有馬氏倫と徳川宗春には摂津有馬本家を通して家系図的に細い糸があった。これと関連するような出来事がある。通春こと宗春が三十三歳の享保十三（1728）年十月十四日^{xxxii}、まだ宗春が梁川藩の大名になる前のことである。文昭院（六代將軍家宣）靈廟に八代將軍吉宗自らの詣出があった。この時通春は、水戸家御連枝常陸府中藩主松平播磨守頼明^{xxxiii}、水戸家御連枝陸奥守山藩嫡男松平若狭守頼寛^{xxxiv}、上野小幡藩主織田美濃守信就^{xxxv}、筑後国久留米藩嫡男有馬中務大輔頼僮と共に予参を命じられた。頼僮は当時は十五歳。英邁な人物で、後世和算の研究をし、名君として

大大名並み^{xxxvi}の待遇を受けることとなる。この五人の予参は、吉宗直々の指名であった。尾張藩連枝で従四位下とはいえ、身分の定まらない部屋住みの通春を列に加えたのは、嫡子とは言え外様の頼僮と共に例外的なことであった。これは学問好きな通春と頼僮を引き合わせさせるための将軍吉宗の配慮であったのかもしれない。しかし、松平主計頭通春（徳川宗春）と有馬中務大輔頼僮の両者が繋がっていることを当然に知っていた有馬氏倫の計らいがあったとも考えられる。

宗春と氏倫が特別な関係があったという直接の証拠はない。しかし、その家系を見る限り、二人が互いに意識しあっていたはずである。宗春にとって、かつて養子になりかけた久留米有馬家が、氏倫にとっては本家筋であるからである。宗春と吉宗の関係を見る場合、この有馬氏倫の存在は見逃せないのではないだろうか。

i 元禄九年十月二十八日（1696年11月22日）～明和元年十月八日（1764年11月1日）

ii 貞享元年十月二十一日（1684年11月27日）～寛延四年六月二十日（1751年7月12日）

iii 寛文八年（1668年）～享保二十年十二月十二日（1736年1月24日）

iv 延宝元年（1673年）～寛延元年八月十七日（1748年9月9日）

v 加納久通は、紀州藩時代も旗本になった直後も1000石であった

vi 以下の記述は『徳川実紀』第五巻による。この叙官は、通常の叙官ではない。将軍宣旨大札のためであることが明記されている

vii 武家の官位は、公家の羽林家に準ずるために、旗本で公職につくものや大身のもの、または一般的な大名の最初は従五位下に任官される。

viii 室鳩巢の書簡（『兼山麗沢秘策』）の享保四年正月五日付けに「有馬兵庫殿、加納遠江守 殿両入勢盛にし、君辺の柄をとられ候故、老中杯いずれも彼に媚申さるる事、目ざましく」と記されている

また、『享保世話』巻一に所収されているには「人にくがる物 人喰犬と有馬兵庫頭」と記されている。ちなみに、「人をはめるもの 落とし穴と稲生次郎左衛門（江島生島事件を担当した稲生正武）」「わるくもなし沙汰程にない物 飛驒がからくりと大岡越前守（江戸南町奉行大岡忠相）」「死でも人のおしまぬ物 鼠とらぬ猫と井上河内守（老中井上正岑）」「無理で人をこまらせぬ物 生酔と水野和泉守（老中水野忠之）」など他にもいくつか記されている。しかし、これらの記述は享保年間の前半にしかなく、松平乗邑が老中に就任した享保八年からは、松平乗邑について言及されたものに比べ、御側御用取次の資料が急速になくなっている。これは幕府が、吉宗の側近政治から、乗邑を中心とした幕府の官僚政治へと変化していったからではないかと推測される。

かなり豪腕な人物であったと噂されていることがわかる。

ix 元禄十二年（1699年）～明和八年二月二十六日（1771年4月10日）

x 万治元年（1658年）～元文二年閏十一月十七日（1738年1月7日）

xi 寛永十八年正月四日（1641年2月13日）～正徳元年十月七日（1711年11月16日）

xii 本多忠勝の嫡男本多忠政の三男。陸奥白河藩十二万石藩主。

xiii 寛文元年九月二日（1661年10月24日）～元禄十一年十月十二日（1698年11月14日）

-
- xiv 慶長六年（1601年）～寛文八年八月二十七日（1668年10月3日）
- xv 天正元年（1573年）～承応元年七月二日（1652年8月5日）
- xvi 建部家は後日許され、播磨林田藩として明治維新まで続いた。
- xvii 永禄十二年五月三日（1569年5月18日）～寛永十九年閏九月二十九日（1642年11月21日）
- xviii 慶長十六年（1611年）～慶安二年三月九日（1649年4月20日）有馬頼次は徳川忠長の家臣であったが、忠長に連座し父の豊氏預りとなり、後に赦免される。
- xix 元禄二年九月十七日（1689年10月29日）～正徳三年七月二十六日（1713年9月15日）万五郎通春こと宗春と夕食を共にするなど宗春をかわいがっていたことが伺われる（『昔咄』近松茂矩）
- xx 有馬則維は旗本石野則員の五男であった。有馬則氏・豊氏の父で有馬本家の初代である有馬則頼の娘が赤松氏満に嫁ぎ子をなした。赤松氏は江戸時代には石野を名乗った。氏満の三男の石野正直は紀州藩士となる。正直の子である石野則員は石野家本家（赤松家）の従兄の石野氏照の養子となり、別家を立てて旗本となった。その石野則員の五男が有馬則維である。
- xxi 明暦二年十一月九日（1656年12月24日）～正徳五年八月三日（1715年8月31日）尾張徳川第二代徳川光友の三男。母は、三代将軍家光の長女千代姫。尾張藩の筆頭御連枝（分家）美濃高須藩四谷松平家初代。
- xxii 徳川美術館に現存
- xxiii 承応三年二月二十五日（1654年4月12日）～宝永二年七月二十日（1705年9月7日）兄の三代藩主頼利が若くして亡くなったため、次男の頼元が跡を継いだ、
- xxiv 最初の正室は出雲松江第二代藩主松平出羽守綱隆の娘の津与
- xxv 寛永元年（1624年）～寛文九年閏十月十六日（1669年12月9日）八条宮智仁親王の第三王子で、臣籍降下し正親町源氏を名乗る。正式名は源忠幸。正親町天皇の曾孫。
- xxvi 慶長五年十一月二十八日（1601年1月2日）～慶安三年五月七日（1650年6月5日）徳川家康の九男
- xxvii 承応元年八月二日（1652年9月4日）・元禄十二年六月五日（1699年7月1日）。父は尾張第二代藩主徳川光友、母は三代将軍徳川家光の三女の千代姫。血統的に最も将軍家に近い人物であった。
- xxviii また光友は故あって広幡家とは義絶していた。ただし光友は定姫をととても可愛がっていて、彼女が亡くなったときは深く喪に服したと記録されている。（『尾藩世記』）
- xxix 久留米藩初代有馬豊氏の娘の一人は但馬出石藩主小出吉重に嫁ぎ、二人の男の子を産んだ。次男の豊祐は母の実家の久留米藩主有馬忠頼に子がいなかったため、その養子に入る。しかし忠頼に実子の頼利・頼元が生まれ、幕府からの命令により松崎藩として分家した。姉婿であった陸奥窪田藩主土方雄隆が、自らの養子として弟の林家に養子に入っていた定辰を迎えようとして仮養子にした。これを江戸藩邸が推した。一方、国元では、雄隆の兄の雄信の子である内匠を推した。この跡継ぎ騒動が雄隆の側室を射殺する事件にまでとなり、窪田藩は改易となった。そのときに仲裁に入っていたのが義弟である有馬豊祐である。しかし豊祐は有効な手を打つことができず騒動を助長してしまった責を問われ、松崎藩は改易となってしまった。
- xxx 尾張藩が解消したのか、久留米藩が解消したのかは詳しい資料が発見されていないので分からない。

xxxii 正徳四年十一月二十五日(1714年12月31日)～天明三年十一月二十三日(1783年12月16日)

xxxiii この翌年の享保十四年七月六日に頼僮は有馬家を継承し、その一月余り後の八月十一日に通春(宗春)は梁川藩を再興した。

xxxiiii 元禄四年五月十一日(1691年6月7日)～享保十八年九月六日(1733年10月13日)従四位下侍従を兼任。

xxxv 元禄十六年二月七日(1703年3月23日)～宝暦十三年十月二十八日(1763年12月2日)父の松平頼貞は宗春謹慎の伝令役の一人。頼寛の正妻は、宗春の三兄で美濃高須藩主四谷松平義孝の娘。

xxxvi 寛文元年(1661年)～享保十六年六月十日(1731年7月13日)

xxxvii 安永元年十二月十五日に従四位下左近衛権少将に任官している。それまで有馬家は極官が従四位下侍従であった。近衛権少将は、国持大名・親藩のうち一部に限られていた。徳川吉宗が彼をいかに特別扱いにしたのかが分かる。